

## 審査の結果の要旨

氏名 百瀬 由璃絵

本論文は、社会保障・福祉政策と労働・雇用政策との間の「社会政策のはざま」で見過ごされてきた心身に不調がある人々が、日本社会にどの程度存在し、どのような困難をどのように抱えているのか、またその心身の不調をもたらしている要因は何かを、実証的に解明することを目的とする。これらは、学術的および社会的に重要であるにもかかわらず、日本においてはこれまで十分な研究蓄積がなく、未踏のまま残されていた課題といえる。

上記の問題関心や分析枠組みを示した序章に続き、第1章では、社会的排除の概念の原点からその後の変遷をたどり、学説の展開を再検討することにより、理論的な整理をおこなった。その結果、今日の社会的排除に関して、計量的にせまるべき課題を浮き彫りにした。

第2章では、日本社会における「社会政策のはざま」で見過ごされてきた心身に不調がある人々の存在を計量的に可視化した。「心身に不調がある障害者福祉制度非利用の稼働年齢層」は、制度的要因や相談支援の機能不全により障害者手帳を所持しておらず、障害者福祉制度以外のサービスもほとんど利用せず、医療機関にもかからない傾向がみられた。しかもそうした層は、現代日本でも一定以上の割合で存在していた。

第3章では、「心身に不調がある障害者福祉制度非利用の稼働年齢層」が、多次元の困難をどのように抱えているのかを記述した。分析の結果、障害者福祉制度の非利用者のなかで、心身に不調がある人々となない人々を比較すると、経済的側面、社会的側面、政治的側面、文化的側面という社会的排除の4側面すべてにおいて前者の困難の程度が明確に大きくなっていた。

第4章では、障害者手帳の所持状況による物質的剥奪への影響を明らかにした。そこでみられた知見は先行研究のそれとは異なり、障害者手帳の所持者が非所持者よりも物質的に剥奪されている傾向は認められなかった。障害者手帳を所持しているか否かということよりも、心身の不調が物質的剥奪のリスクを高めていることが示唆された。

第5章では、幼少期および成人期における経済的・社会的な排除が成人期の心身の不調につながるメカニズムを解明した。幼少期の社会的排除が、成人期の社会的排除を考慮してもなお、成人期の心身の不調に影響を与えていることが明らかとなった。

第6章では、日本における成人期の社会的排除構造を明らかにした。「全側面不利型社会的排除」、「安定労働に隠れた社会的排除」など、社会的排除の下位類型が新たに複数見出された。また30代の人びとに着目すると、2007年よりも2017年のほうが、社会的排除の状況に置かれている者がやや少なくなっていた。

最後の終章では、本研究を総括し、「社会政策のはざま」で見過ごされてきた心身に不調がある人びとの社会的不利がいかに生じ、どれほど深刻であったのかを議論した。さらに、そうした人びとに対してこの先いかなる対処が必要かについて、政策的含意を提示した。

本論文は、従来の研究において盲点となっていた、社会政策のはざまで社会的不利を被る層の実相を計量的に可視化した優れた成果である。ただし、社会政策のはざまの全貌をとらえるまでには至っていないこと、政策効果の立証が十分ではないことなどの限界もある。だが、複数の大規模調査データに基づき重厚な知見を提示したこと、社会的排除の概念を適用して当該分野を理論的に前進させたことにより、明確に研究上の貢献が認められる。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。